

12. 吉地薬師堂遺跡

調査地 野洲市吉地字南出 289 番 14
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 2 年 12 月 24 日

1. 調査経過

吉地薬師堂遺跡は、古墳時代から室町時代に至る集落跡として周知されている。

今回の調査は個人住宅の建設に伴うもので、建物計画範囲において調査区を一つ設定し、現地表面下約 1.0m（標高 87.5m）まで掘り下げ、遺構・遺物の有無の確認に努めた。調査区面積は約 5.5㎡であった。

2. 調査成果

基本層序は現地表面下約 0.5m（標高 88.0m）まで盛土及び攪乱土、その下に暗灰黄色粘質土、黄褐色粘質土と褐色粘質土が混じる層（下層に鉄分が堆積する）、灰色シルト層と続く。現地表面下約 0.9m（標高 87.6m）で確認した灰色シルト層が遺構面とみられる。精査の結果、遺構は確認できなかった。現地表面下 1.5m（標高 87.0m）まで下層確認を実施し、灰色シルト層の続きとともに湧水を確認した。

3. 遺物

遺物は盛土及び攪乱土内から中～近世の土師器・陶器が出土した。

1 は土師器の炮烙である。口径 25.0cm に復元される。色調は浅黄橙色を呈し、外面に煤が付着する。胎土は密で、焼成は良好である。2 は土師器の羽釜である。摩滅が激しく調整は不明である。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は密である。焼成はやや軟質である。

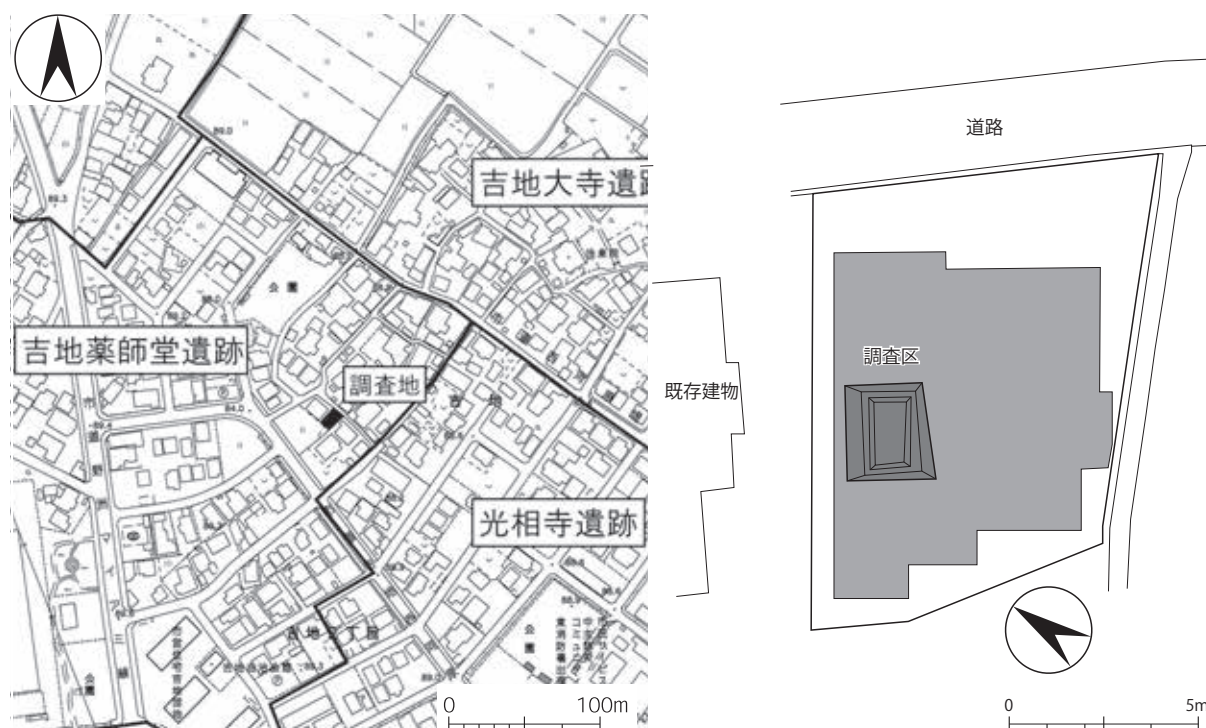


図 1 調査地位置図・調査区配置図

4. まとめ

令和元年度実施の、当調査地の南西側における集合住宅建設に伴う試掘調査（野洲市吉地三丁目1350番、字南出289番6、289番8、289番10）が隣接する調査事例としてあげられるが、遺構は検出されておらず、遺物も少量の出土にとどまっている。出土遺物の存在から、当調査地は吉地薬師堂遺跡の集落地にあたるものと判断される。（岡山）

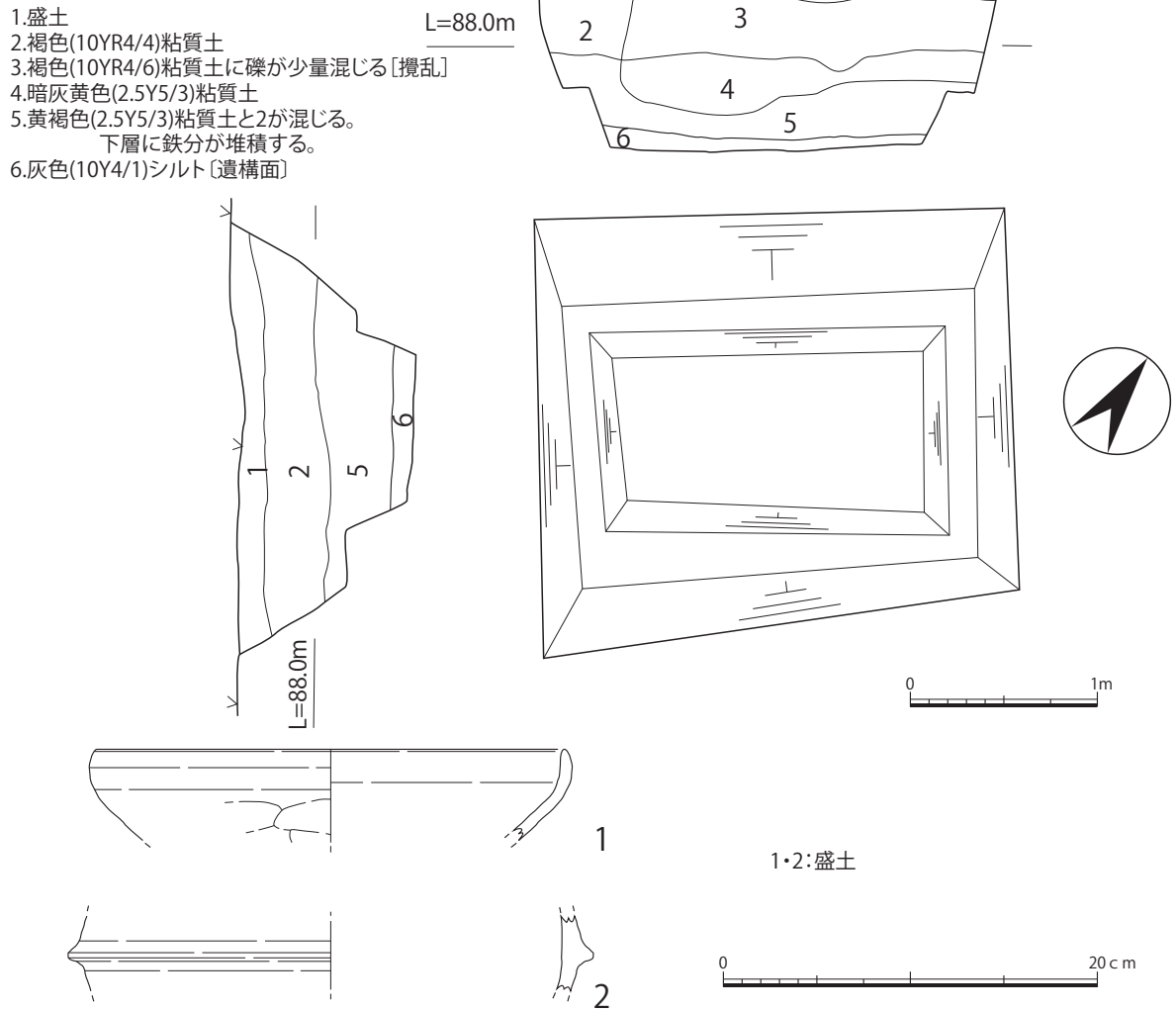


図2 調査区平面図・土層断面図、出土遺物実測図



調査区全景（東より）



周壁土層断面（北東より）

13. 常楽寺遺跡

調査地 野洲市富波字馬場甲 962 番 1 の一部
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 3 年 1 月 21 日

1. 調査経過

常楽寺遺跡は、弥生時代から鎌倉時代に至る集落跡・社寺跡として周知されている。

今回の調査は個人住宅の建設に伴うもので、建物計画範囲において調査区を一つ設定し、現地表面下約 1.8m（標高 90.4m）まで掘り下げ、遺構・遺物の有無の確認に努めた。調査区面積は約 10.8㎡であった。

2. 調査成果

基本層序は現地表面下約 0.5m（標高 91.7m）まで盛土、その下に黒褐色粘質土層、灰黄褐色中粒砂層、灰色粘土と黒褐色粘質土がまじる層、灰色粘土層、灰色砂層、3～4cm大の礫を含む灰色砂層と続く。現地表面下約 1.5m（標高 90.7m）で確認した 3～4cm大の礫を含む灰色砂層の上面が遺構面であると判断されるが、精査の結果遺構は検出されなかった。遺物は出土していない。

3. まとめ

当調査地の位置する宅地は、令和 2 年度の造成時に道路及び擁壁設置部分を対象とした本発掘調査を実施しており、中世の土坑・ピット・濠とみられる湿地帯を検出している。遺構からは中世の土師器や瓦の出土もみられ、中世常楽寺遺跡の存在を確固たるものとしている。当調査地は遺構の空閑地ではあるものの、常楽寺遺跡の集落地にあたるものと判断される。（岡山）

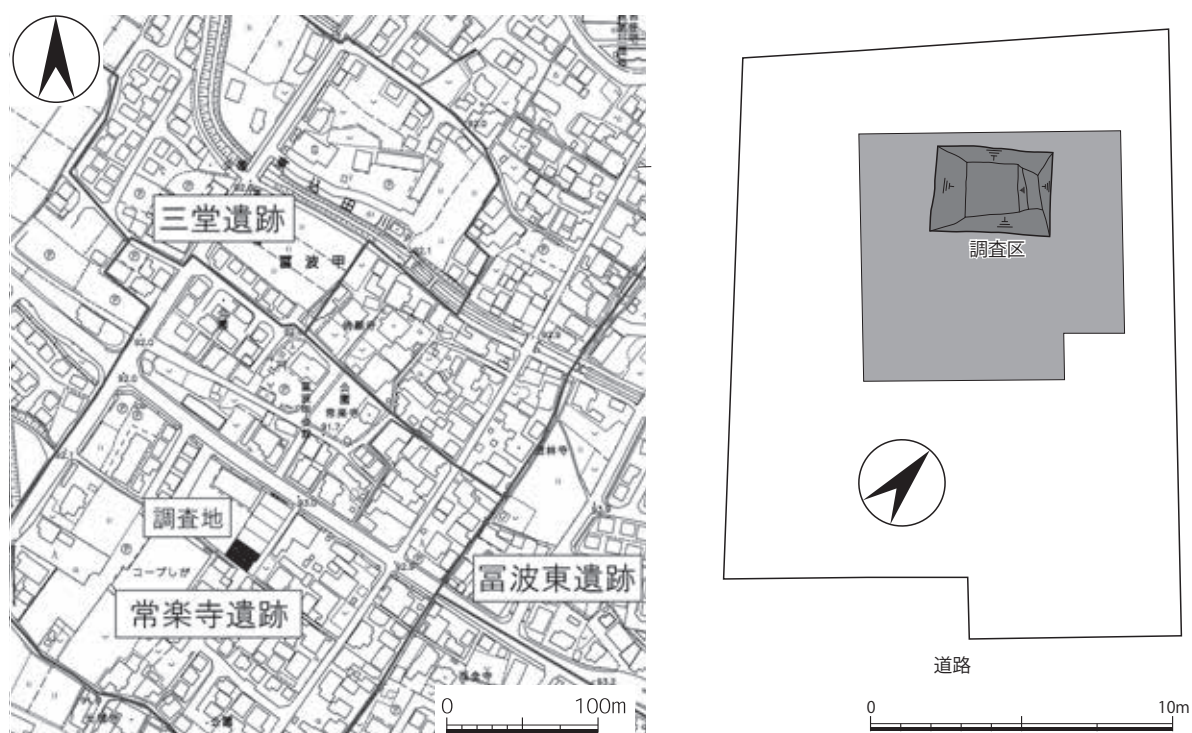


図 1 調査地位置図・調査区配置図

13. 常楽寺遺跡

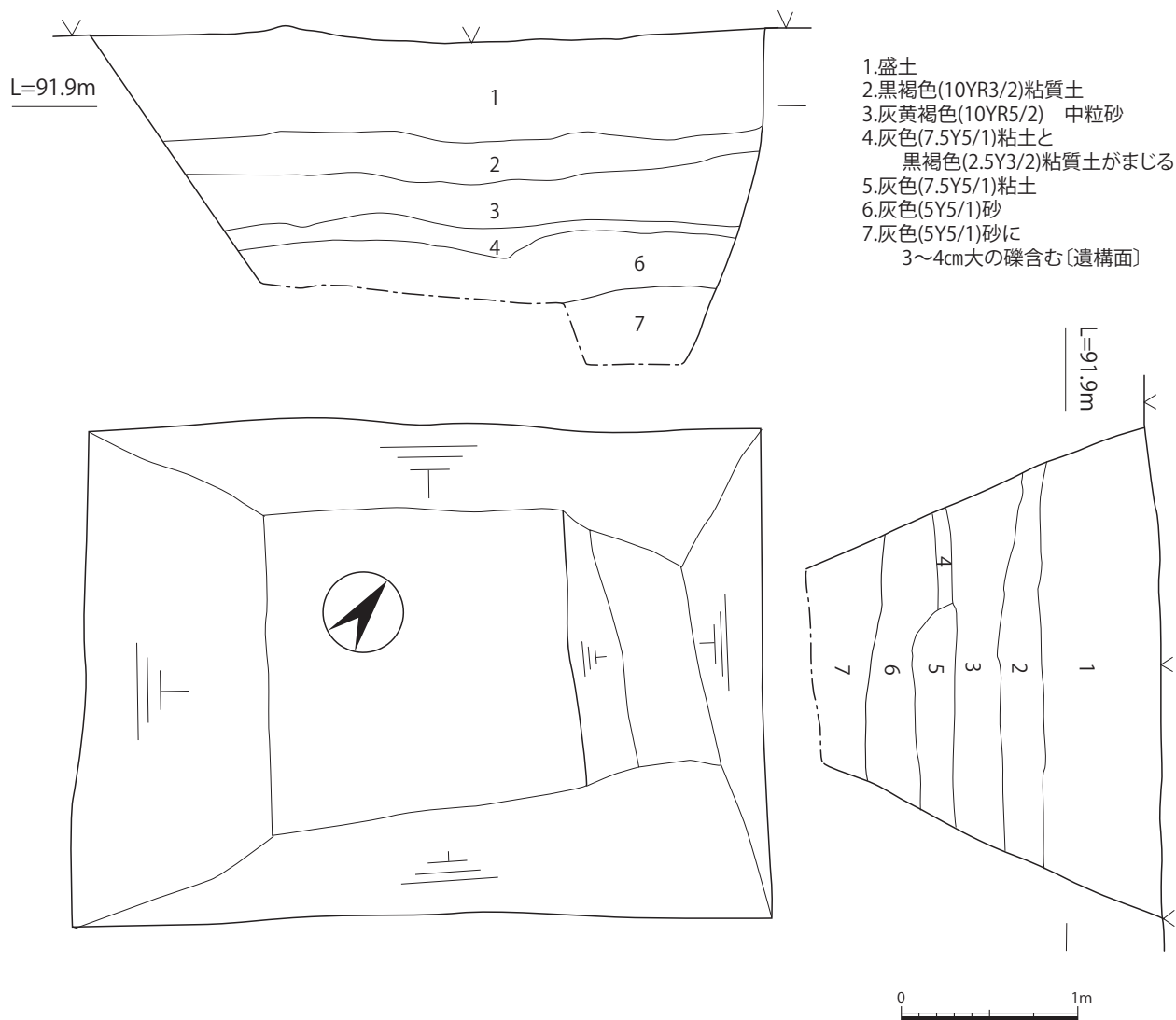


図2 調査区平面図・土層断面図



調査区全景（南より）



周壁土層断面（南東より）

14. さん どう 三 堂 遺 跡

調 査 地 野洲市^{と ば さとのうちこう}富波字里ノ内甲 890 番
調査原因 宅地造成
調査期間 令和 3 年 1 月 25 日

1. 調査に至る経緯

三堂遺跡は中ノ池川右岸に位置する遺跡で、周辺には常楽寺遺跡、野々宮遺跡、江部遺跡が存在する。当遺跡は弥生時代から鎌倉時代にかけての集落跡として周知されている遺跡であるが、周辺に位置する上述の各遺跡もおおむね同時期の集落遺跡として知られている。本遺跡における既往の調査で、本調査地周辺で実施されたものとしては宅地造成に伴い平成 19 年度に実施された試掘調査があげられる。この時の調査では本調査地が面している道路を挟んで南北に調査区を 1 箇所ずつ設定しているが、南側では柱穴がわずかに検出されたものの、北側では遺構・遺物は検出されなかった。本調査地は、当時の調査地のうち、南側の第 2 調査区から東へ約 40m に位置し、三堂遺跡の縁辺にあたる。遺跡の範囲となるのは対象地の南側の一部である。

今回の調査は宅地造成に伴うもので、道路敷設予定部分に調査区を 1 ヶ所設定して遺構・遺物の有無の確認に努めた。調査区面積は約 6.25㎡であった。

2. 調査成果

調査地は大部分が畑地で、道路敷設予定部分は里道として使用されていた。調査地と向かい側（南西側）の田圃とは現状で約 0.5m の比高差がある。基本層序は、1～4 層までは里道敷設時の造成土と考えられ、その下に旧耕作土とみられる黄灰色粘土混じり細砂（第 5 層）が入り、灰色粗砂（第 6 層）となる。この灰色粗砂層を生活面と想定して精査を行ったが、遺構や遺物は検出できなかった。なお、調査終了間際に一部を断ち割ったところ、灰色系の色調の細砂と粗砂が互層になって続いていた。第 6 層上面は地表面下約 0.9m（標高約 91.8m）である。



図 1 調査地位置図・調査区配置図

14. 三堂遺跡

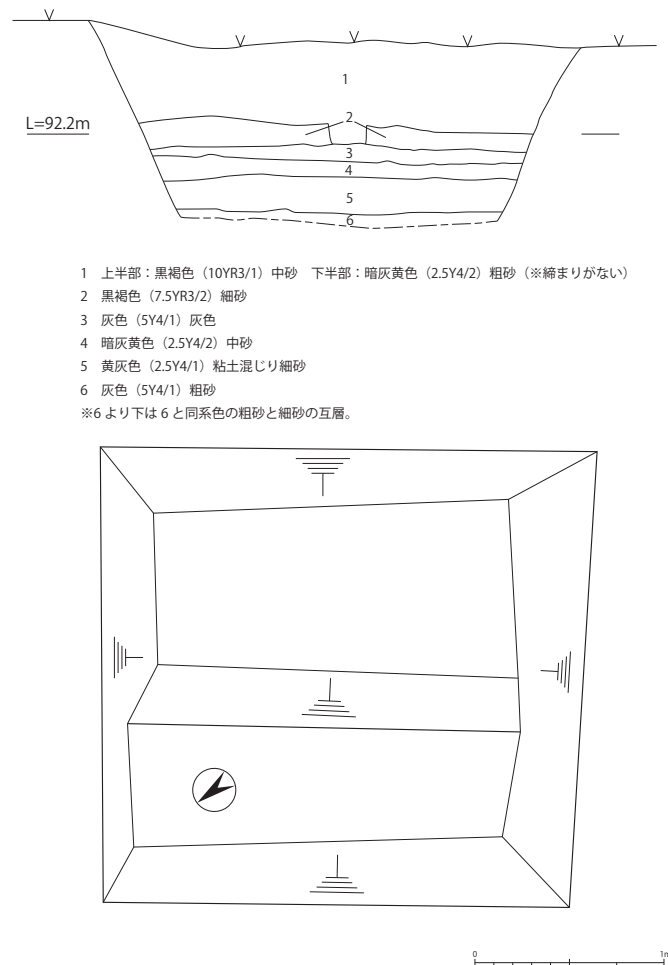


図2 調査区平面図・土層断面図

3. まとめ

今回の調査では、調査範囲が限られていたこともあり、顕著な遺構や遺物は検出されなかった。もとより、平成19年度の調査においても遺構の検出は希薄であり、本調査地も含めた周辺一帯は集落の縁辺部にあたり、人の居住が希薄であったものと考えられる。

三堂遺跡における既往の調査で、特筆すべきものとしては平成8年度に（財）元興寺文化財研究所が実施した富波字三堂甲1121番地外での発掘調査があげられる。この時の調査では3つの調査区が設定されているが、対象地の大部分を占める第1調査区では流路とその中に設けられた粘土取り孔、その北岸で掘立柱建物跡などが検出されている。粘土取り孔はその南側にあたる第2調査区でも検出されている。調査担当者によると当初は居住地で、その後葬地として利用されたと考えられるとのことである。この調査地は今回の調査地のほぼ真西にあたるが、一帯における発掘調査成果も併せて考えると、このあたりが三堂遺跡の集落の中心となるのであろう。（井上）



完掘状況（西から）



土層堆積状況（西から）



下層確認状況（西から）

15. 木部遺跡

調査地 野洲市木部字東里ノ内 836 番 1
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 3 年 2 月 10 日

1. 調査経過

木部遺跡は、弥生時代から江戸時代に至る集落跡として周知されている。

今回の調査は個人住宅の建設に伴うもので、建物計画範囲において調査区を一つ設定し、現地表面下約 1.0m（標高 87.1m）まで掘り下げ、遺構・遺物の有無の確認に努めた。調査面積は合計約 7㎡である。

2. 調査成果

基本層序は現地表面下約 0.2m（標高 87.9m）まで造成土、その下に灰オリーブ色土層、オリーブ黒色粘質土層、暗オリーブ灰色粘土層と続く。現地表面下約 0.7m（標高 87.4m）で確認した暗オリーブ灰色粘土層上面を遺構面として、近世のものとみられる暗渠を検出した。重機掘削にて地表面下 1.2m（標高 86.9m）まで下層確認を実施した結果、現地表面下 1.1m（標高 87.0m）付近で灰色シルト層（腐植物を含む）を確認し、上面にて再度遺構検出を試みたが、遺構は検出されなかった。

3. 遺物

遺物は造成土～遺構面直上に至るまでの層および暗オリーブ灰色粘土層から中～近世の土師器・陶磁器が出土した。1 は土師器の小型の皿である。口径 4.8cm に復元される。内外面ともにナデ調整を施す。色調は灰白色を呈し、胎土は密である。焼成は良好である。

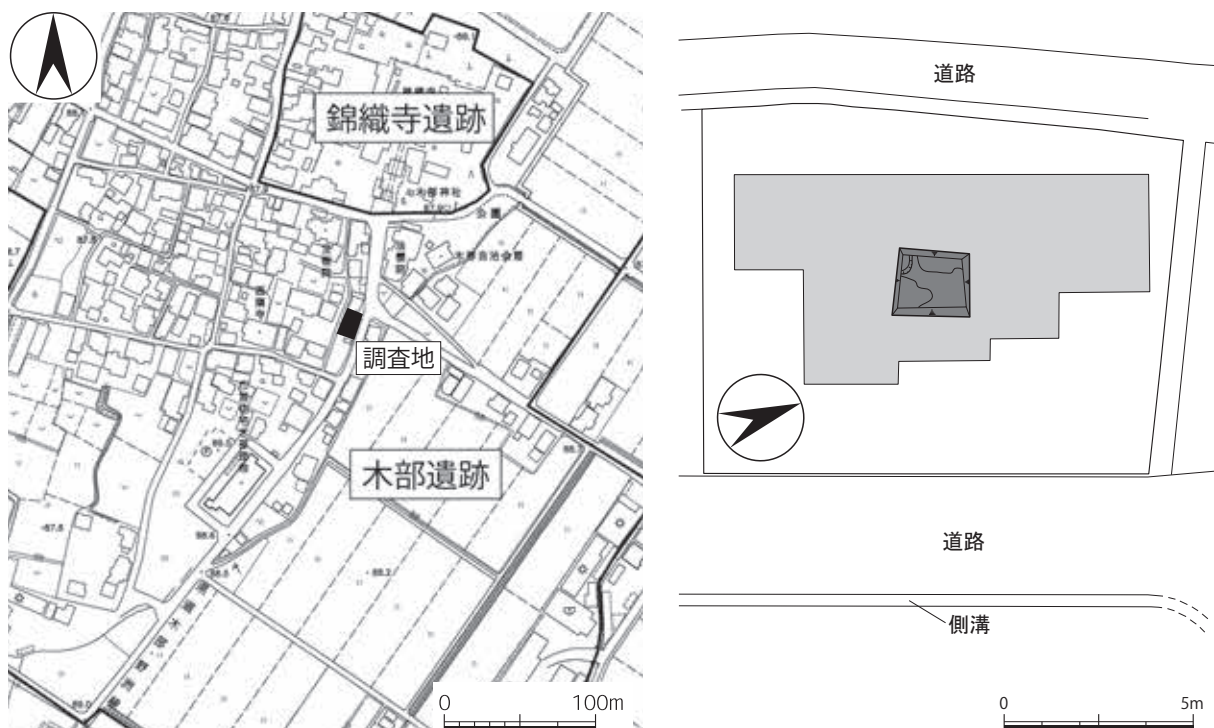


図1 調査地位置図・調査区配置図

4. まとめ

当調査地の北側で実施された平成 21 年度発掘調査（木部字里ノ内 833 番地）において、現地表面下約 1.1m（標高 86.90m）にて 13～14 世紀を主年代とする土師器や陶器とともに溝やピットが検出されている。今回の調査では遺構は検出されなかったが、遺物が出土していることや、北側調査事例との位置関係から、当調査地は木部遺跡の集落地にあたるものと判断される。（岡山）

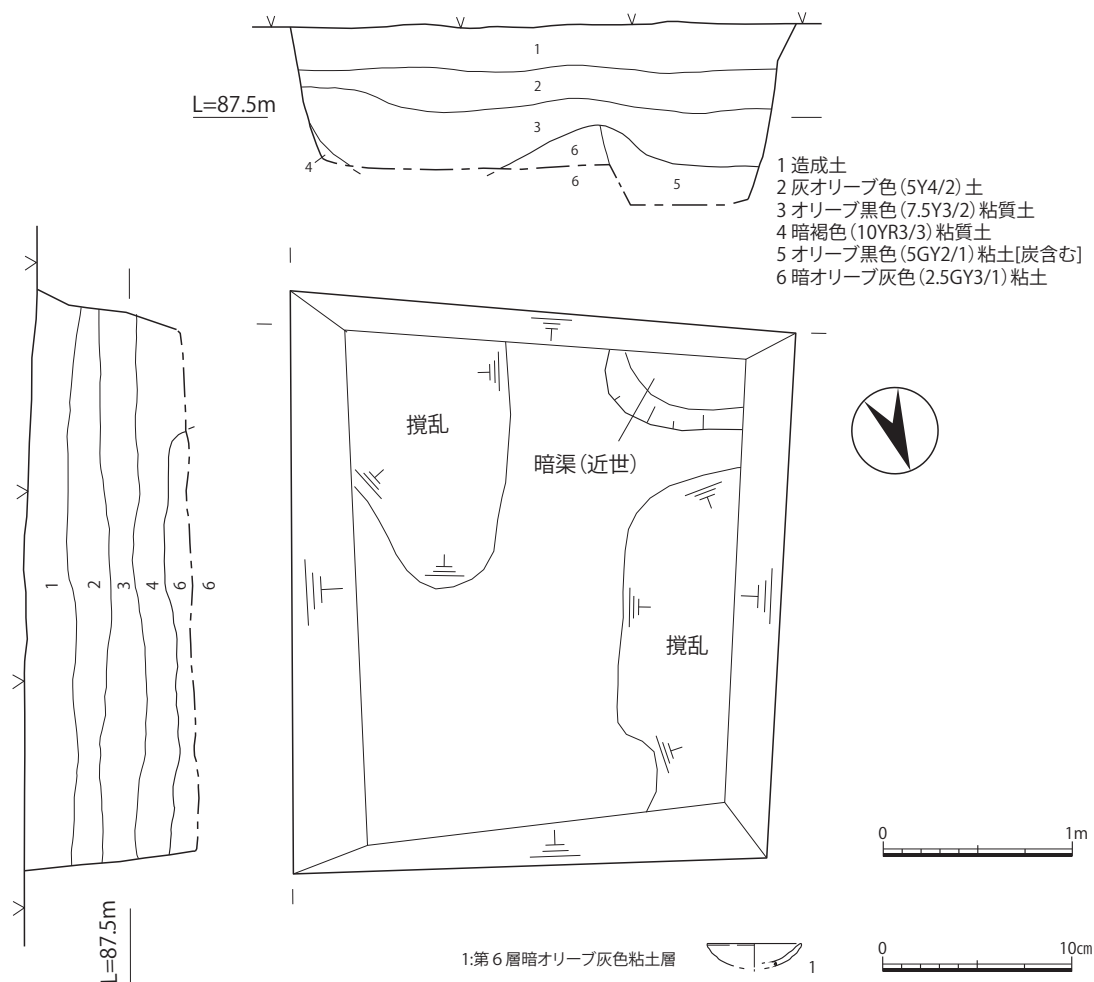


図2 調査区平面・土層断面図、出土遺物実測図



調査区 1 全景（西より）



調査区周壁土層断面（北東より）

16. 小篠原遺跡

調査地 野洲市小篠原字上池田 1284 番 10
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 3 年 2 月 16 日

1. 調査経過

小篠原遺跡は、縄文時代から江戸時代に至る集落跡として周知されている。

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、建物計画範囲において調査区を一つ設定し、現地表面下約 1.8m（標高 97.4m）まで掘り下げ、遺構・遺物の有無の確認に努めた。調査区面積は約 7㎡であった。なお、当初予定していた試掘調査の結果、遺構が顕著に検出されたため、継続して建設範囲内での本発掘調査へと移行した。

2. 調査成果

基本層序は現地表面下約 1.2m まで盛土及び造成土、その下に黒褐色粘質土層、暗灰黄色砂質土層、にぶい黄褐色粘質土層、黄褐色細砂含む粘質土層と続く。現地表面下約 1.6 ～ 1.7m（標高 97.5 ～ 97.6m）で確認した黄褐色細砂含む粘質土層上面を遺構面として柱穴 2 基（直径 0.3 ～ 0.4m、深さ 0.2m）、落ち込み（深さ約 0.2m）を検出した。

3. 遺物

遺物は主に遺物包含層より、古墳時代の土師器・須恵器、中世の陶器が出土している。1 は土師器の皿で、口径 12.4cm に復元される。色調は灰白色を呈し、胎土は微砂粒を含む。焼成は良好である。柱穴 SP01 より出土した。

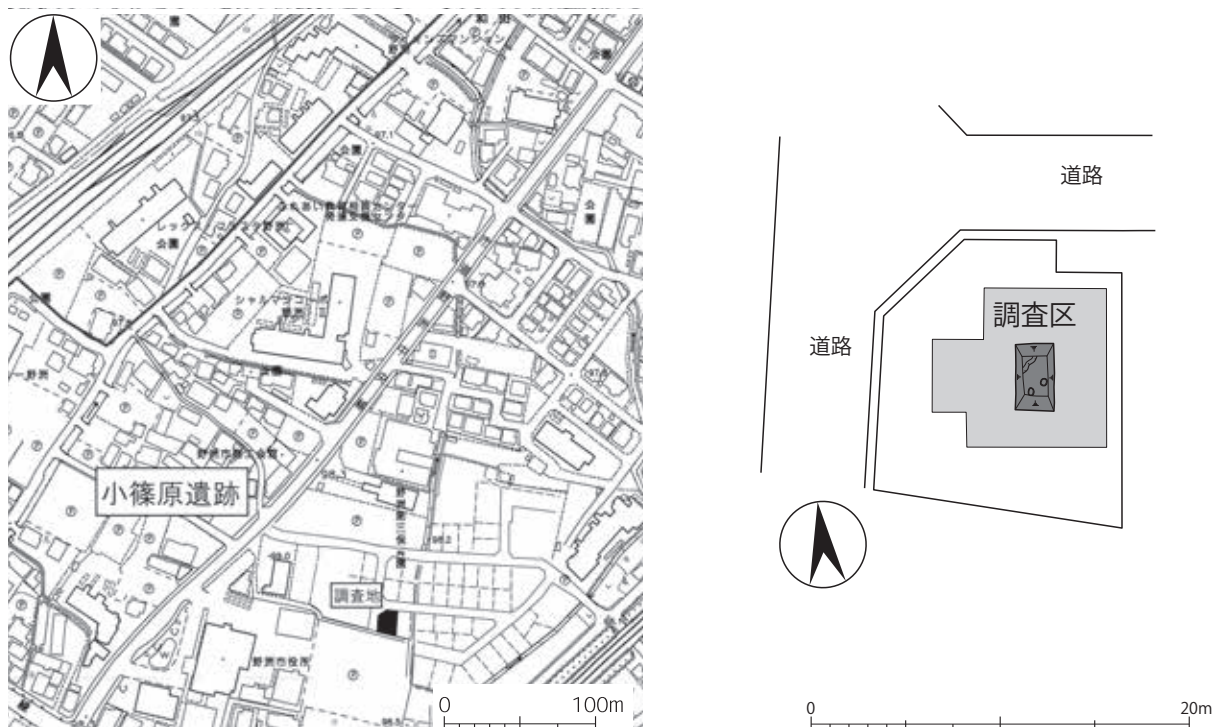


図 1 調査地位置図・調査区配置図

4. まとめ

当調査地が位置する宅地は、平成 29 年度に宅地造成に伴う本発掘調査を実施しており、今回の調査地の北西側にあたる道路造成部において、標高約 97.9m の高さで掘立柱建物やピット、土坑を検出しており、今回検出された遺構もそれらと同時期に属すると判断できる。

当調査地は古代～中世小篠原遺跡の集落地にあたるものと判断される。(岡山)

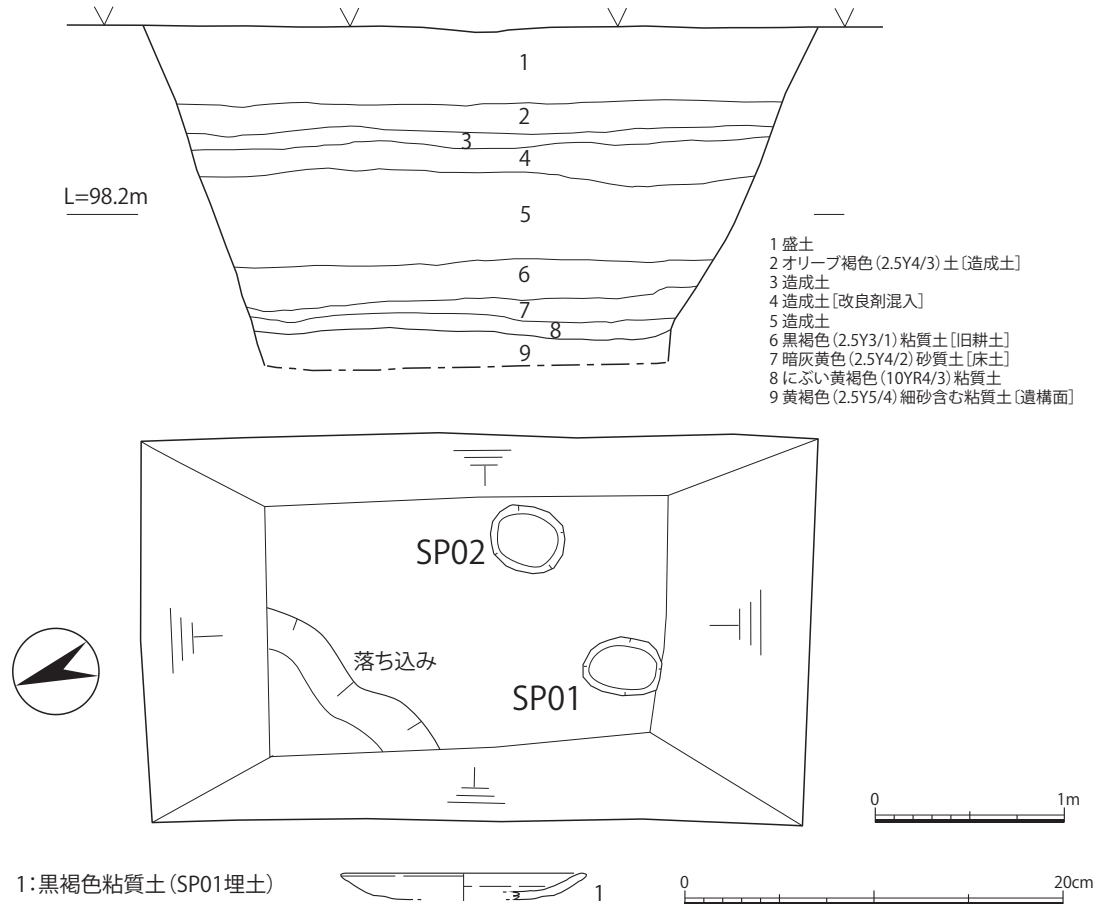


図2 調査区平面図・土層断面図、出土遺物実測図



遺構検出 (北より)

16. 小篠原遺跡



周壁土層断面（西より）



拡張前全景（北西より）



拡張後全景（南西より）

17. 木部遺跡

調査地 野洲市木部字藤ヶ町 2148 番
調査原因 個人住宅
調査期間 令和3年2月24日

1. 調査経過

木部遺跡は、弥生時代から江戸時代に至る集落跡として周知されている。

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、建物計画範囲において調査区を二つ設定し、現地表面下約 1.0m（標高 87.1m）まで掘り下げ、遺構・遺物の有無の確認に努めた。調査面積は合計約 15㎡である。

2. 調査成果

調査区 1 の基本層序は現地表面下約 0.3m まで耕作土、その下に暗オリーブ色粘土層、灰オリーブ色粘土とシルトが混じる層、灰オリーブ色粘土層、灰色粘土層、腐植物含む暗オリーブ褐色シルト層と続く。

調査区 2 の基本層序は現地表面下約 1.0m まで耕作土を含む攪乱土層、その下に灰色粘土層、腐植物含む灰色シルト層と続く。

いずれの調査区においても段階的に掘り下げ精査を試みたものの、遺構・遺物は検出されなかった。

調査区 1 において現地表面下約 1.7m（標高約 85.3m）で確認された腐植物含む暗オリーブ褐色シルト層上面を遺構面と判断した。調査区 2 においても、現地表面下約 1.4m（標高約 85.6m）で腐植物含む灰色シルト層上面を遺構面として精査を試みたが、遺構・遺物は検出されなかった。

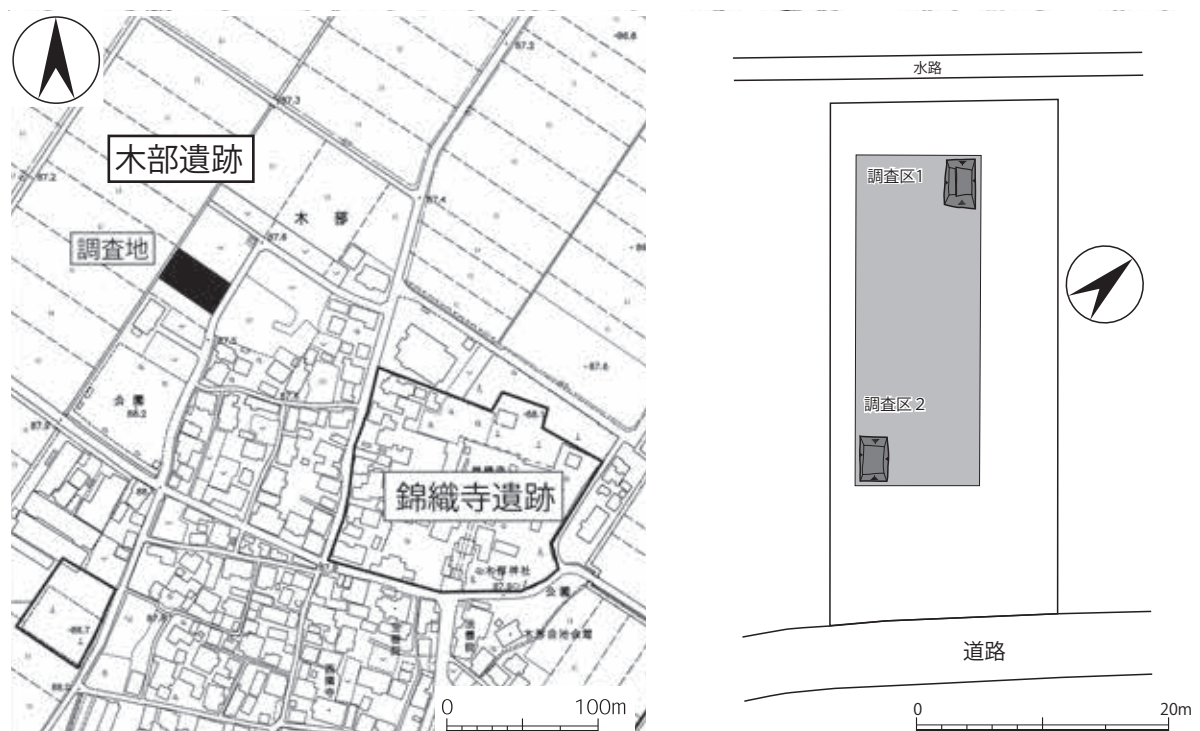


図1 調査地位置図・調査区配置図

3. まとめ

当調査地南西側における発掘調査では、地表面下 1.5m で平安時代中期以降の掘立柱建物や、地表面下 1.8m で平安時代前期の柱穴、井戸、土坑などが検出されている。そのほかにも、南東側地点での工事立会調査時は標高 86.6 ～ 87.2m 付近で遺構・遺物が確認されていることから、当調査地は畑地として造成される際に大規模な攪拌を受けたとみられる。(岡山)

調査区1

調査区2

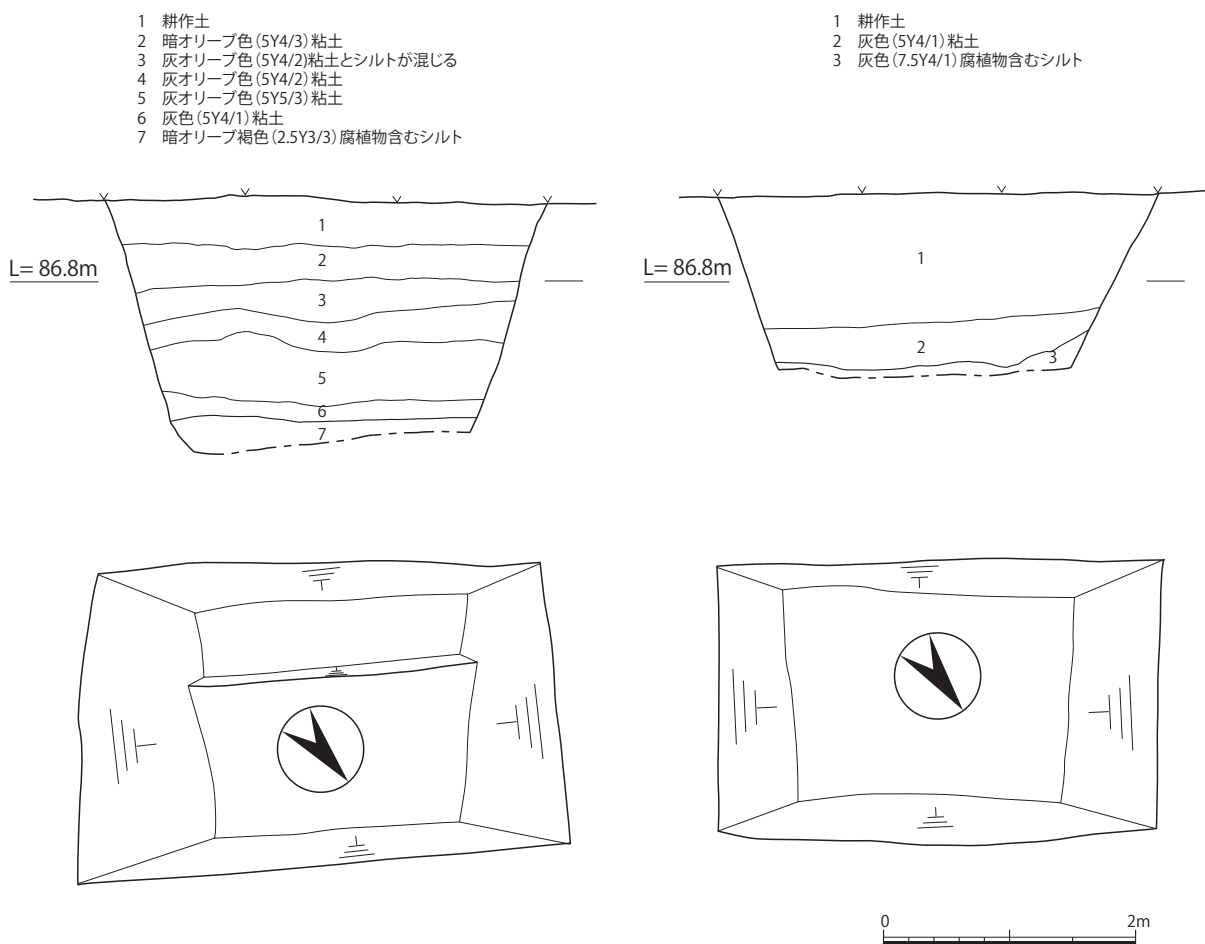


図2 調査区平面図・土層断面図



調査区1 全景 (東より)



調査区2 全景及び周壁土層断面 (北より)

18. と ば 富 波 遺 跡

調 査 地 野洲市^{と ば たけ が はなつ}富波字竹ヶ花乙 780 番 38
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 3 年 2 月 25 日

1. 調査に至る経緯

富波遺跡は中ノ池川を挟んで東西に広がる遺跡で、常楽寺遺跡、久野部遺跡、五之里遺跡に隣接する。遺跡内には富波古墳、古富波山古墳、亀塚古墳があり、中でも富波古墳は市内でも最古級の古墳として知られる。遺跡の性格は弥生時代から室町時代にかけての集落跡であるが、現存する上記の古墳以外にも埋没古墳が確認されており、古墳時代においては墓域としての性格が強かったものと思われる。本調査地が位置する住宅街は、宅地造成時に大部分が発掘調査されているが、当時の調査では、街路の計画範囲に合わせて調査区を設定せず、開発予定地全体にいくつかの調査区を設定している。そのため、既に調査済みの宅地と未調査の宅地が混在する状態であった。

本調査地は未調査で、住宅新築にあたり発掘調査を実施する必要があった。なお、造成時の調査で、すぐ近くから古墳（富波 2 号墳）が検出されており、本調査地において関連する遺構が検出される可能性があった。

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、建築範囲に調査区を 1 ケ所設定して遺構・遺物の有無の確認に努めた。調査区面積は約 6㎡であった。

2. 調査成果

地表面下約 1.28m までは造成土で、宅地造成時か前身建物の建設時に表層改良が行われたらしく、固化が著しかった。また、その際に鋤取りが実施されたようで、旧耕土は残存していなかった。造成土の下は暗オリーブ灰色細砂混じりシルト、黒褐色粗砂・中砂混じりシルトが続き、北側の一部が黒褐色粘土質シルト層となっている。この層は南へ傾斜しており、落込みの肩と考えられる。したがっ

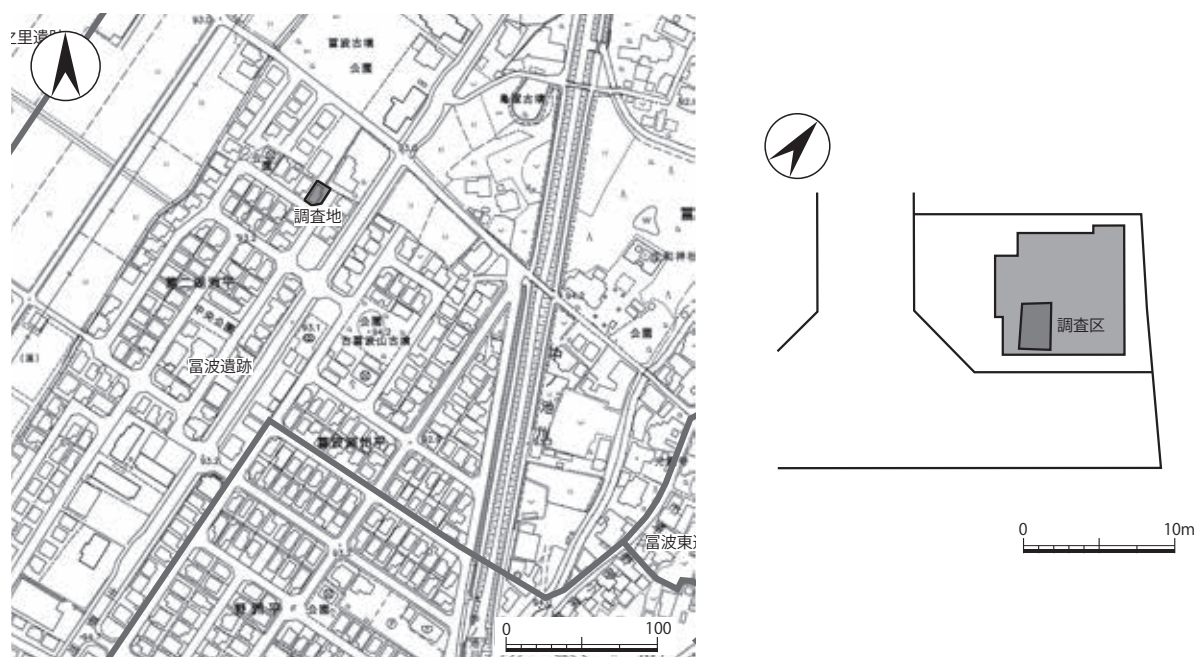


図 1 調査地位置図・調査区配置図

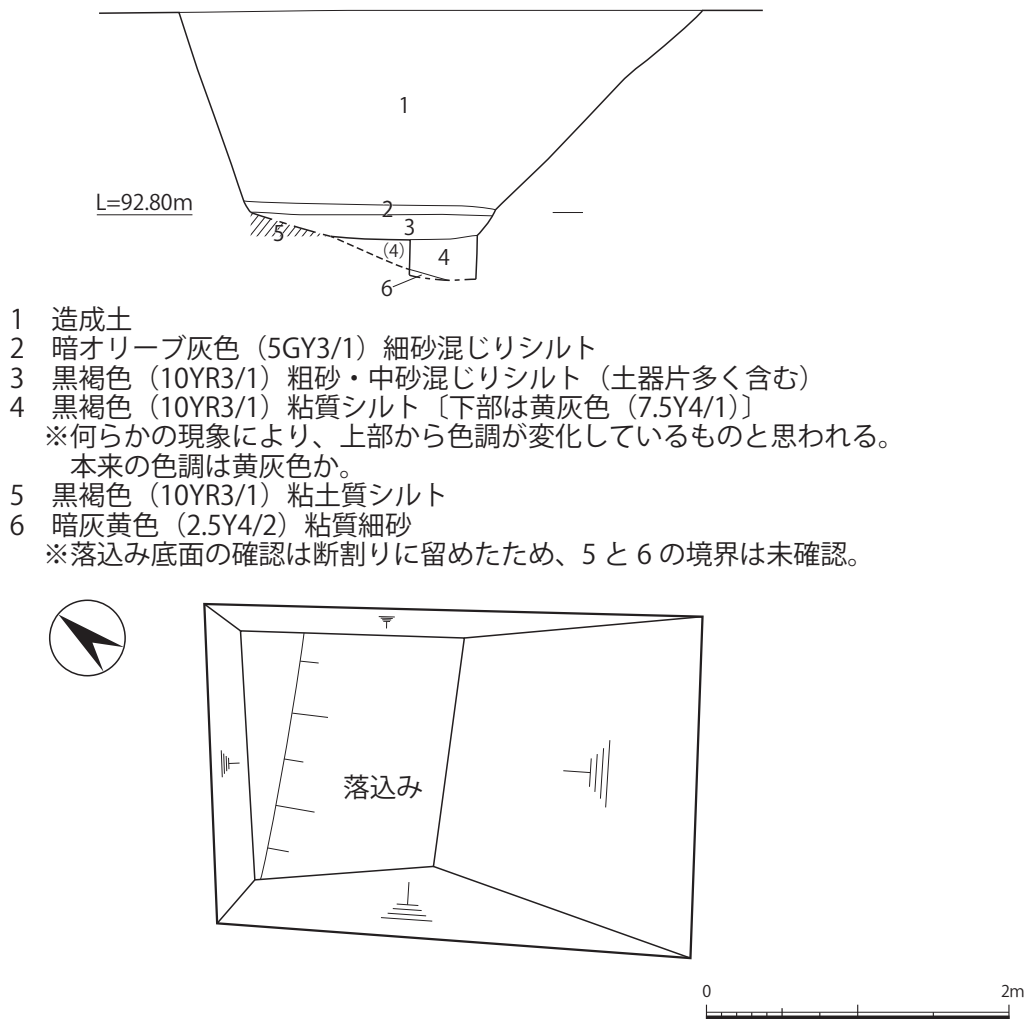


図2 調査区平面図・土層断面図

て、黒褐色粗砂・中砂混じりシルト層は落込み埋土となる。検出できた落込み肩の最上部の標高は約 92.8m である。

改良による固化が著しく、調査区の拡張を断念したため遺構の全容は明らかでないが、現状での深さは約 0.43m で、耕土鋤取り時に上面が削平されている可能性を考慮すると、もう少し深かったとみられる。試掘という限定された状況であり、深さの確認を優先したため断割りを入ただけで調査を終了したが、埋土中からは土師器、須恵器、黒色土器等が出土した。いずれも小片で、実測不可であった。

3. まとめ

まとめに先立ち、隣接地で検出されている古墳（富波2号墳）について簡単に記しておきたい。この古墳は昭和51年度の宅地造成時に検出された古墳で、当時の図面を見る限りでは、墳形は不正楕円形である。墳丘北東の一部が未検出であり、確認されている北西端にやや不自然なコーナーが存在することから、造出などの存在も推定できる。そのためか、当時の報告でも墳形についてはややあいまいな記述にとどまっている。5世紀末～6世紀初頭の築造と考えられる。

今回の調査で検出された落込みは、全容が明らかではないものの溝の一部と推定される。本調査地及び富波2号墳周辺の土地利用状況は明らかでない部分が多いものの、今回検出された遺構も富波2号墳との関連を疑っておく必要はあるであろう。（井上）

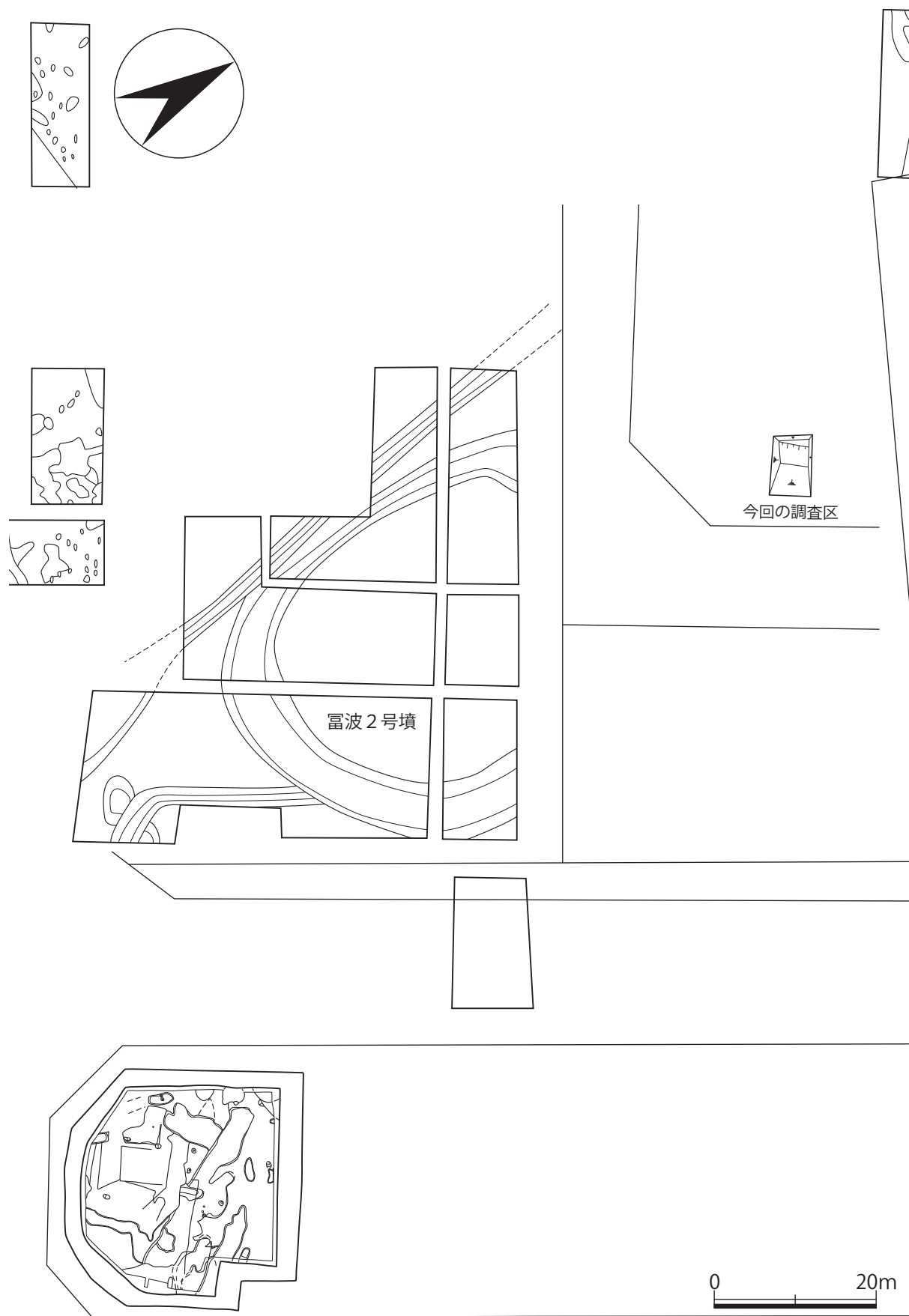


図3 本調査区と既往調査区との関係

18. 富波遺跡



遺構底面確認状況（西から）



北東壁（西から）



南東壁（北から）